

# 英國道路物語 (二)

——道路の發達史——

## 山下 定文

### 第一章 上古時代の道路 (その二)

文化の進歩の過程に於て、道路の次に出現するものは常に橋梁である。上古時代には河川を横斷するには淺瀬を徒渉するより他何等の方法も企てられなかつた。この間の事情は英國に於ける古代の都會の多くが河川の徒渉可能の地點に發達した事實が物語つて居る。これは河川の徒渉可能

の地點は交通の要地となる關係上、居住民に取つて商取引が相當あるからであるらしい。原始的の橋梁建設の例外の一つにダートムアアの古代の石造橋梁がある、これはダートムアア地方は石材が豊富で容易に入手出来るからでありその構造は二つか三つの、巨大な圓石の上に建てられた柱の上に花崗岩の大きな厚石板が渡してあり、全體は撓重量 (Stressweight) に依つて一つになつて居る。この種の橋梁

はストーンヘンヂ (Stonehenge) (英のウイルトンシャー州にある巨石構造) と同時代のものらしく、又確かにこれと同一原理で建設されたものであらう。

英國に於ては有史以來最初に建設された橋梁はすべて木造であつて、兎も角その數も數へる程もなかつたようだ。羅馬人はもとより石造橋梁の理論竝に建設方法に習熟して居たのであるが、英蘭に於ては全石造の橋梁は建設しなかつたようである。相當重要な橋梁でも木造で、ただその橋脚だけが石で造られてあつたが、それも極く少數で大多數は全くの木造であつた。

倫敦のテームス河上に架せられた羅馬橋も木造であり、その後、たび／＼架けかへられたが、みな木造であつたので、洪水や、火事のために絶へず流されたり焼けたりして居た。そうして、一一七六年になつてやつと石造にするこゝとなり、それから三十三年の日子を費して完成した。この橋は二十の低い拱よりなり、それは丁度通水孔のある堤防の如きものであつた。橋上にはその兩側に二列に家屋が

構築せられ、その中にはカンタベリーの聖トーマスに寄進せられた禮拜堂もあつて、橋梁維持費の大部分には店舗及家屋の使用料が充當せられて居たのである。尤もこの橋は嚴密に云へばテームス河上に架せられた最初の石造橋梁ではなく、ウエイリングフオードに架せられたものゝ方が古かつたのである。

英國に於ける初期の石造橋梁の大部分は宗教上の事業として建設せられたものであつて、それも多分大伽藍や僧院を建築したのと同じの建築家並職人の仕事であつたらうと思はれる。これら石造橋梁の宗教的の徴は頗る顯著でありこれら橋梁上に小禮拜堂を建てられて居るもの多く、橋梁維持並修繕費として修道僧が旅客から寄附金の喜捨を受けて居た。この種の禮拜堂は現在でも尙ほウエイクフィールドにある橋梁上に残存して居る。歐米大陸では只だ橋梁の建設だけを目的として居る修道團體すらあつたのである。この修道團體の仕事のうち最も有名なものは佛蘭西のローヌ河上を横斷するアヴィニヨンのあの長い橋であらう。この

ような修道團體が英國にも渡來したと云ふ記録はないけれども、道路及橋梁の維持修繕をその任務とせる宗教心に燃えた團體は確かに存在したようであつた。このような團體の一つにリチアード二世の御代(一三七七—一三九九)にバームシガムに創立せられた聖十字組合がある。宗教的若くは半宗教的の橋梁建設家は英蘭よりも蘇格蘭に於て多く活動して居り、同地方には中世紀に非常に多く立派な橋が建設された。

橋梁の建立が敬神なる行爲だとされてからは、世の敬神家達は時々この建設事業を行ふための基金を寄附するように有難い牧師から奨励せられたものである。記録によれば、十五世紀の頃、ダーハムの僧正トーマス・ラングレイはウエストモンド郡とカンバード郡の間を流れて居るイームント河を横斷する橋梁建設の基金に寄進したものの全部に對して贖罪符を與へることを約した。敬神なる考へから橋梁建設の費とするの意志を以て多額の金員を遺贈する慈善の心深い人々も多かつた。又中には橋梁は公共の使用

に供せられるものであると考へ、その生涯をこの橋梁建設事業に捧げる程の公共心強き人々さへあつた。これは決して樂な仕事ではなかつた。當時、橋梁の建設を自己の一身に引受けるものはその維持をも引受けねばならず、その維持と云ふことは又並大抵のことではなかつたのである。然しながら、リンコルン僧正がこの點につき同情をして馬鹿を見たと言ふ話がある。或日のことであつたが、僧正がニューワークの近くにあるケルハムと云ふ村に行かうと馬を驅つて居ると、或るところで橋梁の修繕工事をやつて居た。これを見た僧正はこのような工事をアバーハム村の橋の所有者達の負擔とするのは過重であると痛く同情してその仕事の工事費の一部として三十志(邦貨約十三圓)あまりを彼等に喜捨と云ふ名目で贈つた。ところが、貰つた村人達は有難いとも思はず反つて卑劣にもこの橋梁維持の重荷をこの立派な僧正に轉嫁しようとする運動をした。然し當時の記録によると、この僧正負擔の訴願は村民の敗けであつたようだ。

橋梁の殆んど大部分はこのように宗教的或は私人の寄進によつて建設せられたものではあるが、王室の干渉に端を發するものも若干はあるようである。これらには國王が橋梁税として知られて居る渡錢徴收の勅許を與へて居り、その稅收入は橋梁建設に充當せられて居た。

又特殊の橋梁の維持のため負擔區分は奇妙で且つ複雑なものも時にはあつた。例へばローチエスターにあるメドウエイ河の木造橋梁が、リチアード二世の時代に九拱の石造橋梁と懸け替へられたが、この時には維持費の負擔は慎重にも若干の各別々の當局に分配せられた。即ち國王は一拱を負擔し、カンタベリー大僧正は二拱を、ローチエスターの僧正は一拱を負擔し、其他の五拱は附近の領主の負擔とされた。一般には、橋梁所在地の所有者がその維持の責任を負はしめられたが、然し、維持の義務が不文律により少數の特定地主の負擔と云ふことが明瞭にすることが能はざる場合にはその橋がその郡内にあるならば維持の義務は單に附近教區のみの負擔ではなくして、郡全體の負擔とせら

れた。又若し橋が都市内にあればその都市の負擔であつた。これは獨り橋梁に對してのみでなく、その兩端から三百碼以内の道路も亦これと同斷であつた。中世紀時代に於ては如何なる特定の人又は團體にせよ確實にこれらの維持費を負擔せしめることは可成りに困難であつたに違ひないし、又各種の規則が一貫した橋梁法に編纂されたのは一五三一年以後のことであつたのだ。

道路の修繕又時に新道建設を目的とする寄附及び遺贈は中世紀に於ても決して珍らしくはなかつた。このような事情で建設せられた新道の形體は土を盛り上げて、或は石を敷いてその周圍の土地より一段高く造られた道路が多く、従つて道路を英語では高い道即ち Highway と呼び始められたのである。然しこのような公共精神の發露から離れては道路の状態と云ふものは全く近接土地の所有者達の善意精力並能力の如何に依存して居たのである。多分道路上の交通が至つて閑散である限りはこの原則で充分であつたらうし、又この原則が殆んど大部分地方交通を拘束して居た

のである。

十四世紀迄は實際にはすべて旅行者は乗馬若くは徒歩で旅行をして居つた。當時は極く近距離を生産物を運搬に用せる粗末な田舎二輪車を除く他は車輛の交通は殆んど或は全くなかつたと云つてよい。この荷車と云ふのが全く原始的のものであり、その多くは平板若くは枝を編んで造られた方形の箱に粗末な車輪を二つつけたものにすぎなかつたのである。軽い小形の商品はすべて駄馬の脊に積んで運搬せられ、重い大形の商品は舟によつて出来る限り遠くまで運送せられて居た。木製の枠に吊られたハンモックに似た乗物の如きはサクソン朝時代（十世紀前後）に於てさへ英蘭には知られて居なかつたことは文獻が證明して居るが、兎に角、當時は英蘭には如何なる種類の乗物も殆んどなかつた。

中世紀に於ては馬に乗れるものは婦人でもすべて旅行は乗馬に依つてなされて居た。最初は貴婦人連は一般に馬脊に男のように跨つて乗つたもので、この時代はまだ婦人鞍

などは未だ英蘭には渡來して居らず、これは十四世紀の末期、リチャード二世の皇后アン（ボヘミア人）が輿入れのときに持つて來たものだと思像せられて居る。ノルマン王朝以後に始めて貴族が時たまに、まだ車輛運輸の範疇には入れられないが、兎に角、馬車とも云べきものを使用し出したのである。これは馬駕籠であつて、一種の棺臺のようなもので、二本の棒の間の兩端に馬をいれてこれを擔はしめるのである。（第一及第二圖参照）従つてその幅はせまく、一般に一人しか乗せられないように出來て居つた。健康な、元氣潑潑な男子はこの種の乗物に乗ることを恥とし、婦人、老人及幼年者の乗物とされて居た。だから、ジョン王ですら死病にとりつかれて居るときにスウインステッド寺院からこの馬駕籠に乗つただけであつた。リチャード二世の後妻イサベラ女王はこの馬駕籠の上で生れたのだらうである。

英蘭に車輪のついた乗物があらはれたのは十字軍以後であつて、當時はその使用も、勿論製作費の高かつた關係も

あるが、國王及其他の大領主だけに限られて居つた。これらの馬車は製造は難しく、且取扱は不便であつたが、通常

四輪で、三頭

か四頭か時に

は五頭の馬に

より牽かれ、

これを一人の

服馬馭者が操

つて居つた。

この馬車の外

観は車輪の上

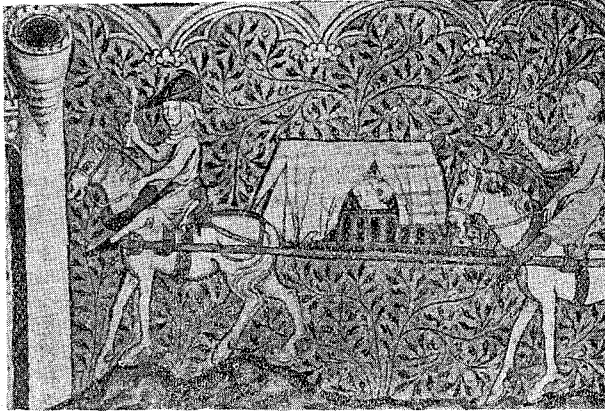
にトンネルの

くついたもの

と考へれば當

らずと雖ども

遠からずである。(第三及第四圖参照)その木造部分は何れも勿論車輪も含めてたが、矢鱈に彫刻をなし、金色に飾り、又車



第一圖 第四世紀時代之馬駕籠

蓋は普通高價な綴織を用ひて造られて居た。これらの貴族用の高價な四輪輕馬車と農民の粗末な荷車との他は如何なる種類

の車も

なかつ

た。

中世

紀時代

の地方

道路は

比較的

に不正

確な需

要で充

分であ



第五世紀時代之王用室馬籠

つたかもしれないが、幹線道路の状態は長距離の財貨輸送は輸送手段たる駄馬によるの他は費用の関係上全く駄目で

あつたので、國內商業は非常に妨げられて居たし、且つ英蘭はその必要財貨を頗る容易に海外から補充出来たので、次第に海外諸國に依存することが多くなつて來た。水上運送は陸上運送に比し費用低廉、輸送速度は大きく、且つ自由なので、概して内國品を輸出し外國品を輸入する方が便利であつたのである。勿論内國商業でも、水上の便のきく限り遠くまで行はれては居た。特に重量大形財貨は仕向地の出来る限り近くまでは



第三圖 第五世紀時代馬車

史料

舟運を利用し、それからさきを駄馬に依つて運搬して居たのである。幾世紀の間河川は英蘭の幹線道路であつたわけである。



第四圖 第五世紀時代馬車の維持の義務を有する者達の間から負擔不公平なりとの不平が出るのはまことに車の當然である。幹線道路の通過せる農村地

方の住民は自分等の實際必要以上に廣く且つ良好にせねばならぬ大道の維持費を彼等が支拂ふべきであるとされて居

一〇九

ることは不當だと考へ始めた。かくの如くにして運輸に對する反感が次第に地方道路政策の中にあらはれて來た。不自然ではなからうが、このような見地は交通の發達に重大

なる障害物であつたが、現存制度の修正若くは變革と云ふことに對する道路維持者は利用者の何れの側にも一般的の要求と云ふようなものは未だ起らなかつたのである。このような兩者いづれよりも起つたところの抗議は全く聯絡統一なく、且つ無效果なものであつた。エドワード一世の御代に早くもウエリントン・ゴードラックと云ふ人は道の車痕と人道の修繕とのためにジョーマーシユ・ニエンハム間の道路を通過するすべての商品輸送車から税金をとるため關所を設置せよと請願して居る。だが國王はこの請願を却下した。その却下理由はこの趣旨に對する實際の反感と云ふよりは無關心のためであつたらしい。と云ふのは王は地方地主が道路通過稅徵收を確保し得る程の實力がある場合には道路の利用者の請願に對しこのこと以上に積極的に回答を與へて居ないからである。例へ

ば記録を見ると、ノツチンガムシャイヤー州のエグラム夫人がケルマニユール間の道路の利用者に對し通行稅を課せうと企てたそうである。

公共の利益は道路の適正なる維持を要求すると云ふこと及全然地方地主の善意にのみ任せられないと云ふことの二つの原則は除々ではあるが、一般の認めるところとなつたが、それが認められてくると同時に、慣習法に依つて課せられた義務を強調しようとする努力するものもあらはれた。時折、道路が適當に修繕せられずに放置せられたるときは代官はその義務を怠れる者等に對して罰金支拂を命令して居つたのである。一三五三年に維持に關し面白い協調が記録に残つて居る。それはテムルバーリウエストミンスター間の道路が修繕せられず放置せられてあつたので、國王は兩側の地主に對して各自の計算に於て再建設し、且つその所有地から七呎以内の道路側を維持すべきを命じ、一方道路の中央の部分はウエストミンスターの市場へ往復するためその道路上を通過する商品全部に課する稅收入を以て



充當せられる基金によつて舗装することとしたのである。それから三年後倫敦市は道路維持のため市内に商品を移入する車輛全部に課税した。この税の正當なる證左として、倫敦附近の道路は曠廢に委せられて居たので、商人及一般取引業者はその運搬商品を遺失損傷することは非常に多かつたことがあげられて居る。その税率は各道毎に荷車一臺に付一片、馬一頭に付 1—4 片であつた。砂、砂利及粘土等の運搬車は一週三片の割合で支拂ふこととなつて居た。高貴の方々に對する食料品又は其財貨は無税であつた。然しながら、今述べたような事例は單に地方的に適用せらるゝに止り、この問題に最も密接な關係を有すべき人々のすべてに示されたにもかゝらず創造心の欠除若くはその無神經のため非常に少なかつた。

中世を通じ、英全國の道路は轍と穴だらけの、そうして冬期になると適正な排水溝の欠除によつて水浸しになるところの泥濘道に過ぎなかつた。急ぐ旅などは天候の悪い日には殆んど不可能であつた。一三三九年の冬は特に甚だし

かつたが、この年なぞには議會開會期日までに到着した議員は兩院を通じ殆んど無かつたので、討論をすることが出来なかつた。倫敦市中の道路でさへ非常に悪かつたので國王が議會開院式に行幸せられたときなどは、國王の鹵簿が恙無く御通御あらせらるゝように轍をふさぐためにその中に薪束を投げねばならなかつた。

英蘭の天候のような不良なるところでは、交通は一年の大半は全然に不自由であつた。雨天の時には道路はまるで沼地か泥炭地のようなから、商品の運搬は非常に困難であつた。その結果として當時英人は長い籠城の準備するように春になつて道路が役に立つようになるまで、飢えないやうに、食料品を澤山に貯えて冬支度をしたのものである。此事は單に一家内に止まらず、程度こそ違へ都市でも同じであつた。中世紀はもとより又其後でも、倫敦では冬の間は主として鹽漬の食料品で生活して居たのである。

(未完)